
何かが乗り移った

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何かが乗り移った

【Nコード】

N8537Q

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

嫌な不安感を感じていた後藤日夜子。友人たちと話していてもその不安感は拭えない。その不安が当たったように自室のベランダから鉢植えを落としてしまう。下を覗くと女の人が倒れている。自分が殺したのだ。犯行がバレるのではないかと恐怖するが、日夜子は冷静に事件に対処していた、はずだった。一週間ぶりに学校へ行くこと決めた朝までは。

事件

日夜子はその日、何故か不安だった。理由は分からない。ただモヤモヤとした嫌な予感が終始自分の周りを取り囲んでいるように感じていた。いつもだったらそんな気持ちは長続きしない。ご飯を食べているとき、友人と話しているときには忘れているものだ。しかしその日、日夜子の不安は消えなかった。

学校から帰り、家に着き、その不安感は気のせいだったのかもしれない、そう思い始めたとき、事件は起こった。

日夜子が欠かさず水をやってる観葉植物。今はポトスだった。そのポトスに水をあげようと自室の二階のベランダに出たとき、うつかりベランダに飾ってあった鉢植えを倒してしまったのだ。その真っ赤なポインセチアは二階のベランダから真っ逆さまに落ちた。ちょうどベランダの真下は公道になっていて、日夜子は誰かに当たったら危ないと焦り、欄干から下を見下ろした。鉢植えは割れて、土が道路に散乱していた。しかしそれだけじゃなかった。日夜子は絶句した。人が倒れていた。その女の人の頭の側には真っ赤なポインセチアが、夕日に照らし出されていた。

そのニュースは大きく取り扱われた。閑静な住宅街で起こった、殺人事件。容疑者の男は殺された佐藤裕子の元交際相手でストーカーをしていた。容疑者はその日も佐藤裕子の後をつけ、アパートに着く前に側にあった鉢植えで頭部を強打。倒れた佐藤裕子に止めをさすかのようにもう一度殴り、殺した。しかし今のところ犯行を認めていない。

日夜子の家には何回も警察が聞き込みに来た。事件現場が家の前だったし、凶器の鉢植えは日夜子の物だったからだ。しかし、日夜子が事件が起こった時間何も聞いていないこと、家族は誰も居なか

ったことを何度も言ううちに警察は今の容疑者を割り出し、日夜子の家には来なくなった。

日夜子は安堵した。しかし恐れてもいた。もし自分が佐藤裕子を殺したことがバレれば自分はどうなるのか。事件が起きてから一週間もしないうちに容疑者は捕まった。しかももちろんその男は犯行を認めない。警察の目が自分に向いてくるのも時間の問題なんじゃないだろうか。日夜子の両親は事件の次の日から、学校を休んでいる日夜子になにも言わない。両親は日夜子が事件が起こった事にシヨックを受けているものだと思うている。事件が起こってから少なからずTVのレポーターが事件現場取材に来ていたし、学校にいけない雰囲気ではなかった。しかしもうそろそろ学校に登校しなければいけない時期だ。これ以上休むと警察に怪しまれるかもしれない。そう、日夜子は自分の中で計算していた。明日は月曜日。週明けで学校へ行くきつかけにもなる。ちょうど良い日にちだ。

日夜子は次の日、事件から八日目の月曜日に学校へ行くために朝起きた。しかしその時すでに日夜子は日夜子ではなくなっていたのだ。

私は起きて、ここは何処だろうと思いました。見たことない部屋。見覚えがないベットに私は寝ていました。その部屋はどこか女の子らしい部屋でクリーム色の壁に学習机、それに黄緑色のカーテンだけを見ると小学生の女の子の部屋のように思えます。しかし壁にはブレザーの制服が掛けてありました。近所の中学の制服です。私はその卒業生じゃありませんが、アパートから会社に行くために駅に向う途中、よく見かける制服です。どうしようか。人を呼ぼうか。そう思っていると誰かが遠慮がちにドアをノックしました。私は「はい」と返事をします。扉を開けたのは知らない女の人でした。もしかしたらこの部屋に住む女の子のお母さんかもしれない、私はそう思いましたが、女の人は私の顔を見て言いました。

「日夜子、今日から学校へ行くんでしよう。起きているなら着替え
て降りてらっしゃい」

私は思わず左右を確認しました。自分以外の誰かが私の隣にいて、
その子に声を掛けているのかと思ったからです。しかし違いました。
女の人は私に話し掛けていたのです。

「日夜子、大丈夫？　ボーっとしてるよ。学校行くのやめる？」

女の人は心配そうに部屋のドアに立ったまま、私に話し掛けます。
私は

「大丈夫。もう平気」

と返事をしていました。

女の人が去ったあとで、私は鏡を見て驚きました。掛けてあった
制服のポケットから見つけた小さな鏡に映った顔は、見たことも無
い女の子の顔でした。綺麗に揃えられた前髪から覗く瞳はクリクリ
として大きく、両頬にあるニキビは執拗に潰された痕がありました。
ふつくらとした唇はリップをしていないのに綺麗なピンク色。肩ま
で伸びた髪は寝起きだからでしょうか。無造作に伸ばしっぱなしな
印象を受けます。丸い輪郭に何処と無くあどけなさが残る、しかし
大人びた雰囲気を持つ子供の顔でした。同じく制服のポケットから
見つけた生徒手帳には、「近隣中学2年2組後藤日夜子」と書いて
ありました。

「ひ、よこ？」

珍しい名前に戸惑いながらも私は現状が掴めてきました。おそらく
なんらかの事情で私は後藤日夜子ちゃんの身体に移ったのです。
私は取り合えず制服に袖を通してながら考えました。どうして私が日
夜子ちゃんの身体に？　その制服は小さくて着れなさそうでしたが、
着てみると私の身体はピッタリと納まりました。日夜子ちゃんは小
柄で、とても華奢でした。

朝ご飯のトーストとコンソメスープを頂き、家を出ました。晩秋
の涼しげな風が私のブレザーのスカートを舞わせます。私は思い出
しました。そして分かったのです。どうして私が日夜子ちゃんの身

体に移ったのか。

私はここで、この家の前で、何かが頭に直撃し、死んだのです。ああそうだ。そうだった。私が最後に見た景色、それは、真っ赤な花とコンクリートの灰色、そして流れる私の赤。^ち私を殺したのは日夜子ちゃんだったのです。

学校の道筋はなんとなく知っていました。駅行く途中の道の横道にぞろぞろと中学生が入っていくのを毎朝見ていましたから。私はそのぞろぞろに混じって登校しています。私は私が死んだことが信じられませんでした。そしてこの、自分が「中学生の日夜子ちゃん」になってしまった現実だって信じられませんでした。しかしこうして登校しています。信じられないからかもしれませんが、私は死んで大胆な行動が取れるようになったのです。クラスは知っている。出席番号だって知っている。しかし友達の名前と顔は分からない。担任だって分からない。だけど、どうにでもなれ！！ どうせこの身体は私のものではないのだから。そんな気分でした。

「日夜子！ 久しぶり！！ 大変だったね」

もうすぐ学校が見えてくる時、女子生徒に話し掛けられました。髪を後ろで束ねるこの女の子はいかにも活発そうな子で、声を掛けるなり私の手を握りぶんぶんと振り回しました。私は曖昧に頷き、どうかこの子が同じクラスでありますように、と祈りました。やっぱり教室の場所と自分の席が分からないのは不安です。学校に入り、教室に近づくにつれて一緒に歩く生徒が増え（たぶん日夜子ちゃん人気ものだったんだと思います）誰かが呼んだ名前で、私は友人たちの名前を把握していきました。教室につく頃には担任の話題も出ていたので、私はもう知らない名前はないんじゃないかと思うほど、このクラスの情報を知りました。結果、自分の机になんやかんやと流されながらたどり着き、ホームルームが始まるまで友人の話

しを聞いていました。

担任は私より若そうでした。しかし休んでいた私を氣遣って、一週間分のプリントやらをコピーしてくれました。

きつと、日夜子ちゃんは先生受けが良く、誰とでも仲良くする、スマートで出来の良い中学生だったんだ。私は一日クラスにいただけでそう感じました。移動教室の時もチャイムが鳴るとすかさず誰かが来て、一緒に移動をする。お昼の時も数人の女子がお弁当持ってきて集まる。男子だつて気軽に声を掛ける。先生は授業中、良く氣にしてくれる。「後藤ーどうだ分かるか？」と冗談のように問題を当てる。私はもう社会人だから分かるけど、こう頻繁に問題を当てられると、日夜子ちゃんは何だか答えられたのか。きつといつも正解を答えていたのでしょう。そう思わせる先生の指し方。

私は少し寂しくなりました。こんなに社交的な人物が私を殺したことで、この世から消えてしまったことに。6時間目、最後の授業が終わり、私はボウツとしてしまいました。するとやはり誰かがすぐに側に来て

「どうしたん？ ボーっとして」

と声を掛けてくれるのです。日夜子ちゃんは何処に行ってしまったのでしょうか。私はこの先ずっと日夜子ちゃんとして生活するのでしょうか。何だか申し訳ないような、そんな氣がしてしまうのです。私が一言も発せずにいると、その子は私が怒っていると誤解したようです。

「あ・やつぱり、久しぶりの学校で疲れているよね。ごめんね。煩かった？」

慌てて私に謝りました。私は考えごととしていただけなので謝り返そうとすると、他の生徒が近づいてきます。

「日夜子、疲れてたの？ そう言ってくれば良かったのに。ゴメン。私も煩くて」

そして次々にクラスメートが私に声を掛けました。「ゴメンね。氣

が利かなくて」「大丈夫？」「平気？」中には「お前ウルセーって」「お前だろ」とまったく関係ないところで男子が小突きあいをしています。私はこの空気は異様だと感じ始めました。私は一言も喋ってないのに、先回り先回りされているような、そんな気味の悪さを感じたのでした。

私は家に帰るとホツとしました。実際には自分の家ではありませんが、身体が覚えているのかベツトにダイブすると全身の力が抜け、今まで緊張していたことが分かりました。誰も居ない家。日夜子ちゃんの部活は週に二回しか活動のない料理部らしいので、私が死んだあの日もきつと日夜子ちゃんは私と同じように誰も居ない家で制服のままベツトにダイブしたことでしょう。私はしばらく枕に顔を埋めて沈黙しました。どこかでカラスが鳴く声が聞こえます。部屋に夕日が差し込み、ちょうどあの時私がこの辺りを歩いていたときも夕日がオレンジ色に染まる、この時間だったことを思い出しました。私はノロノロと制服のスカートとブレザーを脱ぎ、代わりにジャージの下だけ履いて、一階のリビングに降りました。

ニュースをつけるとちょうど夕方ニュースの時間でした。いくつかの交通事故と芸能ニュースの後に私が待っていたニュースが報道されました。「佐藤裕子27歳。頭を植木鉢で殴られ死亡。容疑者は未だに容疑を否認しているが、容疑者は佐藤裕子に少しの借金があったことが判明。佐藤裕子は生前付きまとってくる容疑者を警察に相談していた」全て私自身は知っていたことです。その男は醜く、憎い男だったが、違う。私を殺したのは良い子の模範のような女子中学生なのだ。そう思い、私はやりきれない思いをしました。

事件（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

初のホラーなジャンルです。あんまり怖くないですが……。

そして初めて「小説っぽく、ホンモノっぽく」「。」「の後に改行しないで書きました。

「小説家になろう」で尊敬するの作家さんに憧れたためです。ただ読みづらいただけでしたら、コメントください。

感動、ご指摘、宜しければお願いします。

日夜子

私は殺された女。私は、中学生に、殺された、女。

どうしようもなかったので私はやはり学校へ来ていました。私が何をしたって現状は変わらないし、学校のクラスメートの様子に少しだけ疑問もあったから、それを見極めようとも思いました。

朝、昨日覚えた自分の席に着く前に、私は友人達に取り囲まれていました。やはり、日夜子ちゃんは人気もの。「おはよー日夜子」「おはよー」などとやり取りして、毎朝人気者も大変だ、と私は思っていました。なんだ、昨日の変な感じは気のせいかな、とも思っていました。

それはホームルームが終わり、一時間目の体育の時間でした。一人の男子生徒が見学していた私に声を掛けました。男子はサッカー、女子はテニスをしていて、私はテニスコートの近くの日陰で見学していたので、なにか問題でもあったのだろうか、と思いました。

「日夜子ー。バンソークくれ」

男子は私のところに小走りに駆け寄ると、そう言って手を出しました。なんと日夜子ちゃんは絆創膏を持ち歩くような女の子だったのか、と私は驚きました。

「ええーと、ごめん。忘れた」

私は日に焼けないように（夏は終わったといっても紫外線は侮れないので）木陰から腕の一本も出すか！　と言う気構えでいましたから、男子の伸ばしてきた手を眺めるだけでした。

「そっかー。いつも持ってるのに」

男子は残念そうに言います。私はもう一度、ゴメンと謝りました。男子は擦り剥いた様子の膝を庇う様子もなく歩いてきたので、私は平気そうだと判断し、その場は何もしませんでした。

「今、川野くん、来てたね」

テニスをしていた女子生徒が、ラケットを持ったまま私に駆け寄り
ました。髪を後ろで結んでいる、初日に話し掛けてくれたあの友人
です。

「何話してたのー？」

「怪我したんだって」

友人の質問攻めに私は「はーん」と思いました。この子はその男
子生徒のことが好きなんだな、と。

「大丈夫なの川野くん」

「大丈夫だよ。不安なら行ってあげたら、保健室にいると思うよ」
私は気を利かせたつもりでした。中学生の恋なんて、私からしたら
甘酸っぱくて可愛らしいものです。好きだ嫌いだと、悩んで悩む恋
なのでしょう。友人は両手を組んで、ハーと大げさに溜め息をつき
ました。

「いいの、日夜子の彼氏でしょ」

とても優秀な中学生日夜子ちゃんは恋愛もしてたのか。マセガキめ
！！ と私は思いました。恋も勉強も友情も頑張る日夜子ちゃんは
もう完璧と言ってもいい、スーパー中学生です。感心する私をよそ
に友人は続けました。

「それとも何？ 二人はもう終わってるってウワサ、本当だったの
？」

私は友人の期待のこもった笑みを見逃しませんでした。縋るように、
窺うように、口の端を少しだけ持ち上げた、醜い笑みを。

私はどうしようか、と思いましたが川野くんを追うことにしまし
た。二人の淡い恋愛がどうなるうが知ったことではありませんが、
もし日夜子ちゃんが川野くんのことが好きだとしたら、私の行動一
つで関係に修復出来ない亀裂を入れてしまうかもしれません。どう
せ中学生の恋愛なんて、手を繋いでドキドキ！ みたいなピュアな
ものなのでしょう。川野くんを追って一言謝る、もしくは心配する
素振りをするだけでいいのです。しかし私の考えは甘かったのだし
た。

「川野くん、大丈夫？」

私は保健室で手当てを受けていた川野くんに声を掛けました。保健室の先生はにっこりと笑って、

「授業はどうしたの？」

と聞きますが、私はサラツと流して、川野くんの側に行きます。

「痛くない？」

「全然へーき」

川野くんは先生に貼ってもらった絆創膏の上から、わざと傷を叩いて見せました。大丈夫そうです。私は川野くんと一緒に保健室を出ました。

「まだ、怒ってんの？」

校庭に戻る途中、川野くんが私に聞きました。

「なんで？」

と私は聞き返します。もちろん、思い当たりがまったく無かったのです。もしかしたら先程友人に言われた「終わってるってウワサ」に関係しているのかもしれないと、うつすら思いました。

「だって、アレから苗字で呼ぶじゃん」

「アレ……」

私はアレとは何だろうと俯き、考えました。川野くんにはきつと私が困って、まだ怒っているように見えたことでしょう。

「ゴメンって。でもお前は、俺の家に誰もいないって言った時、もうそういう事だって分かっていると思ったから」

そういう事？

「普通さ、彼氏の部屋に入るんだったら、覚悟とかしてるんだろうなって思ったから」

私は自分の靴を見つめたまま、川野くんの話を聞きます。

「ゴメンって。でも、もうイキナリしないし。な、機嫌直せって」
中学生の恋愛って、手を繋いで、キャッドキドキ！とかそんなもんだろうと思っていました。私は急にスーっと自分の頭が冷めてい

くのが分かりました。最近の中学生ってマセてるな？ 大人だな？
いいえ、川野くんはガキでした。そして、日夜子ちゃんのまわり
には、色々な不穏な気持ちが取り巻いていたのでした。私は川野く
んに言いました。

「やっぱり、もう終わりだね。私達」

もちろん最高の微笑みを忘れずに。私は川野くんの呆気に取られた
顔を確認してから、走って校庭のテニスコートに向いました。

さて、私はやはり、見逃しませんでした。テニスをしていた友人
の期待と不安の混じった顔を。彼女に

「私、もう別れたから」

そう言うと、友人はパアッと顔を輝かせて、でもすぐに元に戻して、
「つり合わないと思ってたんだ。川野ちゃんと日夜子。別れて正解！」
と私に駆け寄り、私を抱きしめました。スーパー中学生の日夜子ち
ゃんはこのことに気がついていたのでしょうか。きっと知っていた
ことでしょう。一番の親友が自分の彼氏に片思いをしていることに
彼は中学生らしからぬ恋愛を強制するヘンタイで、だけど今まで
は自分から別れられなかったんじゃないでしょうか。自分が「良い
子」だから。「良い子」のレッテルのおかげで、自分からはフレな
かった。

しかし私は違いました。私は「良い子」の日夜子ちゃんではあり
ませんでした。日夜子ちゃんに殺された私は日夜子ちゃんの「良い
子」のポジションになんの未練もありませんでした。私は友人に言
ってやりました。

「いいよ。川野くんはフリーだから、告白してみたら？」

もしかしたら私は意地の悪い笑みを浮かべていたかもしれません。

やはり、先生は私を授業中、良く指します。

「後藤、お前なら分かるな」

そんな言葉を言いながら。私は社会人ですから、スラスラと答えます。数学だって中学生のものなんてまだ「算数」と言っているほど、単純です。しかし中学生の日夜子ちゃんはきつと毎日がプレッシャーだったはず。毎日「答えられなかったらどうしよう」と不安だったはず。答えられる自分に誇らしかつたのは最初だけ。どんどん授業は進み、問題は難しくなる。きつと答えられずに口ごもり、俯く自分を想像しては恐怖したことでしょう。きつと。

私は先生に言いました。「優等生な日夜子ちゃん」なら言えないことも、日夜子ちゃんに殺された私になら言えるのです。私は「優等生」なんてなりたくありませんから。

「先生、分かりません」

数学の二次関数のグラフの問題を解くようにと、私を指した教師は驚いた顔をしました。

「本当かー、後藤。お前が解けないような問題じゃないぞ」

「知りません、分かりません、答えられません」

実際その問題は初歩的で、ただ二本のグラフの交点を求めるだけでした。簡単に暗算で計算出来ました。しかし私はしませんでした。

先生は私の態度に驚いたようでしたが、

「分かった」

と渋々納得し、その問題の解説を始めました。

私は友人への態度も改めました。来るもの拒まず、ニコニコと受け答えるだけではなく、友人を選びました。自分に不利益な友人には近寄らないようにしました。取り合えず、川野くんに好意を寄せているあの友人とは口を聞かないようにしました。もっとも体育の授業が終わってからは、彼女は私には話し掛けようとしませんでした。

中学生なんてこんなもんだ。と思いました。もともと後藤日夜子の友人が多過ぎていたのです。周りの人への態度が良すぎていたのです。八方美人過ぎたのです。少しだけ小さくなった後藤日夜子の

世界は、とても居心地が良く、私はこれが正常だと思いました。

数日が経ちました。その日は休日で、私は一人部屋にいました。ふと思いついて私はベランダに出てみました。黄緑色のカーテンの先には、大人が三人程しか立てないような小さなベランダがありました。ここに置いてあった鉢植えが私を殺したのだ。赤いポインセチア。しかしそこには何もありませんでした。ベランダには、植物のあった痕跡すら見当たりませんでした。

「どうして」

しかし答えは簡単でした。後藤日夜子が私を殺した直後に片付けたのでしよう。自分の犯行を隠すために。警察から逃れるために。日夜子は警察に「家では玄関前に置いてある鉢しか植物を育てていない」と言ったのです。だからその玄関前に置いてあった植木鉢で、犯人は被害者を殺したのではないか。と警察に思わせるために。

私はズキズキと心が痛むのを感じました。フワフワとした吐き気のような苦痛。胸に突き刺さるのは、日夜子ちゃんに対しての憎悪。しかしそれは当たり前の行動とも思えました。

ベットにダイブします。お昼過ぎなのにリビングに降りない私を心配してか、母親がドアをノックしました。私は「起きてるよ」と小さく言いました。

「私達、出かけるから、適当にご飯食べて」

母親はドアを開けずに、ドア越しに私に言いました。母親と父親は外出しました。

少しだけ寂しい気持ちになりました。きっと優等生の日夜子ちゃんが部屋の中にお昼過ぎまでいても、母親はなんにも心配いらないのでしょう。少し寂しくなりました。それと同時に警察に出頭しよう、と思いました。優等生が殺人をしたと、誰が信じるだろう。そしてその誰かの驚いた顔を、私は見てみたいと思いました。

日夜子の周りの全ての人の、信じる日夜子が崩れる、その瞬間を、

私は見てみたいと思ったのです。

日夜子（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

日夜子は美人ではないですが、社交的で、頭が良くて、生徒からも教師からも人気者です。

その人気ぶりをぶち壊すのは簡単？

分かりませんが、彼女は躊躇しませんでした。

日夜子の世界を壊していきます。

残るのは正しい日夜子の世界なのか、それとも……。

上記に書いたのはあまり次回には関係ないことです。

しかし書いてみました。

私が今ふと気になったことだし、なんだかミステリアスチックだし。

読んでくださってありがとうございました。

感動、ご指摘、宜しかったら、お願いします。

次回、完結予定。

終わり

駅に程近い小さな派出所に一人の女の子が訪れた。花柄の茶色のワンピースに白いジャケット、ロングブーツといった秋を感じさせる服装だった。すぐに来る冬の寒さの前触れのような、気温は暖かいながらも風の強い午後だった。

最初、交番に駐在している警官はその子何か、落し物でも届けにきたのかな、と思った。中学生らしい女の子は戸惑いや不安な顔一つせず、しつかりとした様子だったからだ。しかし話を聞いて驚いた。自分が近所で起きた殺人事件の犯人だと言った。しかもその事件はすでに犯人が自白し、解決していたものだった。

「私は被害者の佐藤裕子なんです」

日夜子は精神科医の前ではつきりとそう言った。自分が後藤日夜子に殺され、そして日夜子に乗り移ったのだと。日夜子は警察に出頭したが、もう犯人は捕まっていた。日夜子は捕まることなく、親に引き取られ、そして一応任意で出頭させられた。日夜子の言い分にも一理あった。しかし精神が不安定だという事で、精神科医に診てもらっているのだった。

「日夜子ちゃんが手から滑らしたポインセチアで、私は死んだのです」

日夜子は主張を変えなかった。その姿を見て母親は泣いた。

「しかしね。被害者は後頭部を殴られているんだよ。一度目は後ろから、二度目は倒れたところを殴られたんだよ」

医者には根気よく、説得した。しかし日夜子は認めなかった。

「私は会社の帰宅途中、歩いていて、上から鉢植えが落ちてきたんです」

「キミが佐藤さんだとして、どうしてキミはキミの家族やプライベートを知らないのかな」

それは……日夜子は口ごもった。確かに家族の記憶がない。

「それはきつと、殴られて、記憶が曖昧になっているのです」

「そうかね」

医者はおざなりに頷いた。そして手元にある資料（今までの日夜子の言ったことを記録していたので）を見つめた。交番に出頭してから一度も主張を変えない。どれだけ矛盾を指摘しようと。日夜子の隣に座っている母親が心配そうに医者を見つめた。この子はどんなってしまうのでしょうか、と目が言っている。

あるいは、医者は思った。この子が言っていることは真実なのかもしれない。手を滑らし、鉢植えを落としたことは事実。しかし佐藤裕子には当たらなかったのではないか。いや違う。医者は思う。後藤日夜子の部屋のベランダには鉢植えはなかったと警察は言っている。

「私はこの人だつてあの朝、初めて見たのです」

日夜子は隣に座っていた母親を睨んで叫んだ。母親は「日夜子っ！」と叫ぶ。

「こんな人、私のお母さんじゃありません!!」

そうだ。私のお母さんはもっと、優しい人だった。こんな年中疲れたような顔をして、人を窺うような目の人じゃなかった。日夜子はお母さんを思い浮かべた。しかしどんなに思い出そうとしてもその像は結ばなかった。

「こんな人、知りません!!」

日夜子の母は、両手で顔を覆い泣き崩れた。医者は慌てて母親を部屋から出るように促した。母親は歩くのがやっとといった様子で、フラフラと部屋から出て行く。小声で「よろしくお願いします」と言っのを日夜子は聞いた。

「娘さんは事件のショックで混乱しているだけです。さあ、後は任せて」

部屋には医者と日夜子だけとなった。

「さあ、佐藤さん、と呼んだほうが宜しいですね」

「はい。私は佐藤裕子ですから」

日夜子は医者が出たと自分の言葉を信じてくれたのかと、思った。しかし警戒は怠らなかった。

「佐藤さん、事件のことを詳しくお話してください」

「それは、もう何度も申しました」

「はい。しかし佐藤さんが想像する日夜子さんの犯行ではなく、佐藤さんがその日何をし、何があつて事件現場に来たのかを知りたいのです」

医者は椅子に座りなおし、日夜子の言葉に耳を傾けた。

「会社の帰り道です」

「それは知っています」

「それ以上は覚えてません」

頭を殴られたのだから、と日夜子は付け加えた。

それは困りましたね。医者はそう言つて黙り込んだ。日夜子是不安だった。自分はどうかしてしまつたのか。母の顔も思い出せないなんて。

医者が日夜子に尋ねた。

「では佐藤さんと容疑者の男性とは、どんな関係でしたか」

「ストーカーされていました」

日夜子は答える。大丈夫、分かると自分で確認しながら。

「もっと具体的に」

「それは……」

またも日夜子は言いよどむ。答えられない質問に当たると、自分が分からなくなった。じゃあ、私は誰？ 佐藤裕子じゃないなら、私はいったい誰なの。

「でも日夜子ちゃんが私を殺したんです。植木鉢を滑らして」

日夜子は必死に叫んだ。自分にはそれこそが真実で、それ以外は存在しなかった。

「でも、その植木鉢はあなたの部屋のベランダにはなかった。あつた痕跡もなかったんですよ」

「日夜子ちゃんは、隠したんです。事件が起きてすぐ、ベランダを掃除して」

「そんな……」

辻褄はあっていた。しかし医者には信じられなかった。いやその前に、どうしてこの子は、そこまでして自分が人殺しだと主張したいのだろう。

「では何処にその鉢をしまったんですか」

「部屋の押入れです」

自分が人殺しだと認めてもらいたかったのなら、佐藤裕子になりきらないほうが信じてもらえる。佐藤裕子を演じた所為で日夜子は頭がおかしくなったと疑われているのだ。

「この話は私達だけでは出来ませんね」

医者は資料に書き込み、言った。

「警察の方も一緒のほうが良いようです」

事件は解決した。結局日夜子の部屋から、枯れたポトスとシクラメンの鉢が出てきた。その後犯人が「自分は二度も殴っていない。一回は俺だが二回目は知らない」と供述を変えたため、後藤日夜子が事件に関与したのだと発覚した。日夜子が鉢を落とす前に佐藤裕子は死んでいたのかも知れない。生きていたのかもしれない、それは分からない。しかし日夜子は未成年でまだ13歳だったため、保護観察がただけだった。精神が不安定で「自分が佐藤裕子だ」と名乗りながらも罪を告白したことも、結果として良い方向に動いた。

5度目の診療は医者と日夜子だけで行った。日夜子の処分が決まり、学校に転校すると連絡したあとだ。日夜子は電車で三駅の中学に通うことになった。

「もしかしたら、日夜子ちゃんは寂しかったのかもしれない」

日夜子は医者に言った。

「もしかしたら、毎日が嫌で仕方がなかったのかもしれませんが。優等生な自分にも、媚びる友人にも。なんにも分かってない先生にも、分かってくれない彼にも。親だって何にも気がつかなかったし、気がつこうともしなかった。だけど一番嫌いなのは自分自身だったんじゃないでしょうか。人に言えない自分。良い顔しようとする自分。優しいねって言われて、すごいねって言われて、その言葉をプレッシャーに感じてしまう、気の弱い自分。誰かの言葉を信じれない、悪いほうに受け取ってしまう小さい自分」

「そこで、植木鉢を落としてしまった」

「わざとじゃないんです」

日夜子は小さな声で繰り返し返した。わざとじゃない。

「殺してしまったと思った？」

医者は優しく聞いた。出来るだけ慎重に、刺激をしないよう注意しながら。日夜子の握っている手が真っ白になっていた。日夜子はコックリと頷いた。

「それなのに、気がつけば自分の保身のことばかり考えていた。そんな自分が最低だった」

日夜子は震える声で続けた。

「だから、だから……日夜子ちゃんは逃げたんです。自分の身体から」

「それで、空いた身体にあなたが入ったんですね」

医者は少し、失望した。日夜子は正気を取り戻したと思ったのだ。しかしもう一息の予感があった。

「そうです」

日夜子はぼおとした目で医者を見ていた。これからどうなるんだろう。聞きたくないことを医者に言われる予感がした。

「あなたは、誰ですか？」

医者が言った。私は誰なんだろう。誰なんだっけ。日夜子はどうしようもなく不安になった。自分が分からない。どうして此处にいるのかさえ、日夜子には分からなくなっていた。

「あなたは、後藤日夜子さんです」
医者ははつきりと言った。

「変な名前。どうしてこんな名前つけたの？」

小学校で名前をからかわれた。ピカピカの新しいランドセルで、自分までもが立派な大人になったと勘違いしていた。その頃の私。夜遅くに帰ってきたお父さんに聞いた。

「パパがね、病室に入る前は暗かったんだ。夜中で。出張先から飛んで帰ってきたんだけどな。でね、お前が産まれて、手術室から出てみると、びっくり、お日様が出てたんだ。明るくてね。誰もが、世界中の誰もがこの子の誕生を祝福してくれているんだと思ったね」
お父さんの顔は覚えていない。多分私がお父さんの顔を見れなかったからだと思う。だって自分の名前に不満があるのは両親に申し訳ないような気がしたし、名前の由来を聞くのは少し恥ずかしかったから。お父さんの大きな手だけ覚えている。

「夜と昼の間に生まれたから、そう名づけたんだ」

「こんな変な名前に？」

「嫌かー？ 俺はかわいい名前だと思うけどなー」

お父さんの大きな手だけ、覚えている。

映像が映画みたいに頭に流れた。

「多分、辛かったんですよ。一人ぼっちな気がして。成績で褒めてくれたのは最初だけで、いつしかそれが当たり前になって」

真っ白い四角い診察室。医者と日夜子だけがそこにいた。

「もう限界だった。ずっと。だから自分じゃなくなってしまうえば良いって思っただけ。それで全部やり直せばいい」

でも、と日夜子は言う。

「でも、人を殺して、どうなってしまうんだと思うと、怖くて。」

消えてしまいたかった」

日夜子は泣いていた。握った両手にポタポタと雫が垂れた。

「私は、私は……」

医者は日夜子の背中を優しく叩いた。

「もう大丈夫。キミは誰も殺してないし、だから誰から見捨てられたりしないんだ」

二人だけの部屋に嗚咽が響いた。

「はら、お父さんとお母さんをお呼びよ。帰ろう」

「はい」

日夜子は小さな声で、でもしつかりした声で言った。

こうして事件は終わった。後藤日夜子は新しい学校で楽しく過ごしている。もとの学校の友人ともたまに会って遊ぶ。中学を卒業したら地元の高校に通うつもりだ。

精神科医の資料には日夜子は情緒不安だったとしか書かれていない。だとしたら彼女はなんだったのだろうか。日夜子が作りだしたあの人格は、いったい何だったのだろうか。

終わり（後書き）

完結です。

読んでくださってありがとうございました。

なんていうか、読んでいて先が分かるミステリーは最悪ですね。
だからこのお話のジャンルはホラーです。なんて。

たぶん私が書いた中で、一番暗いお話でした。

感想、ご意見、アドバイス、宜しかったらお願いします。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8537q/>

何かが乗り移った

2011年2月24日18時38分発行